

《授業報告》

ジェンダーセンシティブな学生を育てる
——グローバル・エデュケーション・センター（GEC）設置科目
演習「ジェンダーと教育」

*Developing Gender-Sensitive Students in the Global Education Center
(GEC) Course “Gender and Education”*

はじめに

筆者は、「ジェンダーと教育」の演習を20年近く担当してきた。この演習では、家庭教育、学校教育、社会教育の各領域から学生たちの問題意識を基点に据えて検討課題を設定し、ジェンダーセンシティブな学生を育てることを目的としている。教育の営みは、自らを形成するプロセスであるだけに、対象化しにくく、しかし、何らかの理由で違和感を持ち始めるとそれまで思いもなかった教育の差別構造が認識される。当たり前と思っていたことが当たり前ではなく、何らかの社会構造と深く関連していることや、個人個人の能力や努力の問題に解消されがちな問題が社会的な問題と認識され直していく。その多くが10代後半から20代前半である学生たちが豊かな人間性を育てる機会になることを願って授業の展開を検討してきた。

本稿では、2019年度と2020年度に開講された全学向けの演習「ジェンダーと教育1・2」のうち、各年度の後半にあたる「2」の授業の中で共有した記録を手がかりに、授業報告を行う。ここでは主に「大学教育とジェンダー」というテーマに取り組んだ。なお、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大による授業開始の遅れに伴い、各クォーターが通常8回のところ6回へと回数が減り、

「1・2」合わせて授業は計12回しか行われなかった。また授業のオンライン実施により、授業予定の大幅な変更があったことをお断りしておく。

1. 本演習のねらいとこれまでの取り組み

本演習は、身近な教育問題を共同で考えることを通して、ジェンダーセンシティブな学生を育てることを目指している。日常の身の回りにある教育的な関係や営み、自らの人格を形成している人と人との関係のあり方をジェンダーの視点で客観視し、それらを組み替え自らを育てていく経験をするを通して、教育のあり方の再構成の糸口をつかむこともねらいとしている。教育の営みは、人が社会化する上で誰一人かかわりのないものはいない。家庭教育、学校教育、社会教育、さらに意識の形成の観点からとらえるならば、メディアのあり方等広く社会的な関係のなかにもそれは見いだせる。

この演習を開講した2000年代の初めは、早稲田大学内には「ジェンダー」を冠した授業も多くなかったが、近年は相当の科目数になってきている。一方で、設置されている学部には偏りがあり、本演習のように全学向けのグローバル・エデュケーション・センター（GEC）設置であることにより、過去を振り返ると学内のほとんどの学部から受講生が集まってきている。したがって、教育学に関する知識のない学生も多く受講していたが、それぞれ教育を受けてきた経験はあることからそれをベースにして展開してきた。

この演習を選択した理由やこの演習で取り組んでみたいテーマを問うと以下のような各領域での男女差別や性別役割分業、「男らしさ、女らしさの強制」などに関するテーマが挙げられた。

- ・学校教育の制度と歴史： 女子大学の存否、良妻賢母主義教育
- ・学校教育における隠れたカリキュラム： 名簿の並び順、ランドセルの色、教科書の中の性別役割分業
- ・家庭教育における性別役割分業： 男の子と女の子の育て方、お手伝い

・社会教育についてはあまり基礎的な知識がないため、問題を認識しにくいようであったが、テレビドラマやコマーシャルなどのメディアなどが社会的な意識形成の機能を果たしているのではないかということを伝えると、俄然、メディアが意識に与える影響についてはとても身近であるために様々なテーマが浮上していた。

これらのテーマに加えて筆者は授業担当者として、学生からは挙がってきにくい、このテーマとして考えるべき課題や時代状況と関わって検討すべきと思われる課題を提起して進めた。たとえば、学校におけるセクシュアル・ハラスメントやスポーツとジェンダーなどが挙げられる。

学習の方法は、グループで共同研究する方法を基本とした。受講者は所属学部、学年、問題意識も多様な学生であったが、異なる立場や問題意識に出会うことにとっても意味があると考えたからである。今ほどインターネットやSNSが発達していなかった時期は、授業時間以外にも集まりをもって自主的に勉強会を開くグループなども見受けられた。近年は学生の忙しさもあり、授業時間外での学習活動が難しい状況にもなってきたため、できる限りグループワークも時間内に取り入れるなどして授業を進めてきた。

そのようなテーマや方法に取り組みながら、現在大学で学ぶ身でありながら、大学教育そのもの、大学教育とジェンダーというようなテーマでの問題意識があまり浮上しない傾向があり、あえて2019年度からは、「大学教育とジェンダー」をテーマに据えることとした。

2. 2019年度の取り組み

「ジェンダーと教育1」では、演習を進める共通の体験を基盤として作るために学校教育とジェンダーをテーマとして共同研究を行い、「ジェンダーと教育2」において、大学教育を対象の領域とした。「2」のシラバスを示すと次の通りである。

第1回：オリエンテーション；各自の問題意識の提示、共有

第2回：大学におけるジェンダー・セクシュアリティ① 大学教育の歴史を通して

第3回：大学におけるジェンダー・セクシュアリティ② 女子大学の歴史を通して

第4回：大学におけるジェンダー・セクシュアリティ③ 専門職教育を考える

第5回：大学におけるジェンダー平等教育のあり方を考える①

第6回：大学におけるジェンダー平等教育のあり方を考える②

第7回：総括①わたしたちの学習の展開を整理し、身近なところにある性／生についての課題を探る。

第8回：総括②わたしたちの学習の展開を整理し、大学教育におけるジェンダー平等教育の展望を考察する。

第2回から第4回までは、大学教育をジェンダーの視点でとらえる目を育てるために、戦前の教育制度の歴史や大隈重信の女子教育論、女子大学論¹などの資料を提示して検討し合った。学生たちは、高校までの歴史学習の中で、戦前の教育制度が男女不平等、男女別学であったこと、高等教育の機会が開かれていなかったことなどはある程度知識として知っている。しかし、そのような中であって先達が女性たちに対して高等教育の機会を開く努力をしてきたこと、たとえ良妻賢母教育の下であっても、学ぶ機会を得て婦人解放運動などの戦いを展開した人たちが存在したことを受け止めていた。

第5回、第6回において、「フォト・ウォーキング」という方法を試みた。「フォト・ウォーキング」は、「カメラを携えて街路などを散歩し、おもしろい場面に出くわしたらすかさず撮影する、といった趣旨の活動のこと」²と定義

¹ 早稲田大学編『大隈重信演説談話集』岩波文庫、2016年。

² IT用語辞典BINARY

<https://www.sophia-it.com/content/2020年10月20日参照>。

されている。筆者自身は、2014年度のGECの全体活動として学生実行委員会
が取り組んだことに学び、受講生に、大学の構内を歩き、ジェンダーやセクシ
ュアリティの視点から気になった場面、建物や施設などを写真で撮影し、それ
を教場内でスクリーンに映し出して討論するという試みなのである。³

小グループを組み、構内を歩きながら携帯のカメラで気になるところを撮影
し、教室に戻って共有した。撮影に際して人権に配慮することも伝えた。撮影
されたのは、男子トイレの向こう側に作られた「誰でもトイレ」の配置や建物
内部の施設、タテ看板、傾斜のある路面であったりした。

共有の場では、「なぜ、それを撮影したのか」グループの仲間同士で討論し
合い、それを全体に報告し、さらに全体で討論するということにした。

そのような取り組みを通して学生たちは、「(誰でもトイレや授乳室は：筆者
補注) 作ればよいということではなく、本当に望まれた形で実現させるためにも
当事者の意見を確実にくみ取ることが重要だと感じた。」や、「何か変えなけ
ればならないことを意識化するとき、異なった視点を持つ人と会話すること
や自らの疑問を言語化することがとても大事だと改めて思った。」とコメン
トを記している。このような方法で他者との対話の中で意識化されていく自分
の問題意識に気づいていった。

また、筆者は、教材として、毎年ジェンダーや教育学の授業には、赤ちゃん
人形⁴や妊婦体験ジャケットを教室に持参して学生たちに体験してもらって
いる。この時は、赤ちゃん人形を抱いて構内を歩いてもらった。妊婦体験ジャケ
ットは7キロ強あるため、腰痛防止コルセットをする仕様になっており、足元
が見えにくくいきなり身につけた学生が構内を歩くのは危険が伴うと考え、赤

³ 「2014年度グローバル・エデュケーション・センター設置 全学共通副専攻「ジェ
ンダー研究」学生参加型ワークショップ 開催報告書」早稲田大学ジェンダー研究所、
2015年3月。

⁴ 看護教育、両親学級等で使用されている新生児期の赤ちゃん人形と妊婦体験ジャ
ケット。赤ちゃん人形は、身長50センチ、体重3キロ、妊婦体験ジャケットは7キロ
グラム強。

ちゃん人形のみ使用し、数名のグループで交代しながら抱いて歩くように指導した。なお、こうした教材に抵抗を持つ学生もいる。したがって、必須ではないことを伝えて開始した。

学生たちは赤ちゃん人形を抱いて構内を歩くということだけでも様々な違和感を抱いて教室に戻ってくる。以下のような気づきを何人もが書いている。

実際に赤ちゃんを抱っこして歩いてみると、いつも何気なく歩いている道の歩きづらさ、動線の複雑さなどに気がつきました。

立場を変えてみることで、見える世界が変わること、それをグループの仲間と討論し言語化することで、想像力が膨らんでいく。次のコメントもグループで歩きながら話したこととして書かれていた。

「妊婦の学生は想定されていない。おとなになってから大学に来る人もいるのではないか」という話し合いをしました。

日本の大学の中にはそうした存在はあまりに見慣れないからであろう。周囲の驚きを隠せない反応があることを感じ取って教室に戻り、歩きながら考えたことを共有し合った。

この演習を通して、「教育とジェンダー」について検討を重ねていくことで、フォト・ウォーキングによって認識された建物や施設の配置のあり方に象徴される物理的な問題のみならず、それを糸口とした大学におけるジェンダー関連の授業のあり方、そこで得た様々な価値観を相対化する経験、そして教室の中での教員の指導の際の言動への違和感などが表明された。特に教員の指導の際に表れる固定化された性別役割分業観は、私たち教員にとっては大きな課題として認識しなければならない問題である。

3. 2020年度の取り組み

(1) 演習の概要

さて、2019年度において、上記のような気づきを得ていくことができることを、授業を通して実感したこともあり、2020年度はさらにこれを授業の早い段階で取り組み、学生一人ひとりの認識の枠組みを意識化させ、フォト・ウォーキングという共同の体験とグループでの対話を通して、学生たちの意識化がどのような状況の中で起きるのか、大学という教育の場でそれをどう支えていけばよいのか、そうしたことを課題として設定して授業に取り組みたいと考えていた。そして、大学教育における隠れたカリキュラムの問題等踏み込んだ視点の共有を行って、フォト・ウォーキングに取り組む予定であった。しかし、コロナ感染拡大により、オンラインで授業に取り組まざるを得なくなり、中軸に据えた方法を断念せざるを得なかった。授業回数も各クォーター6回ずつに減らされた。

「ジェンダーと教育1」では、主に家庭や家庭教育に領域を定めて開始した。折から、コロナ禍により、「Stay Home」が叫ばれていた時期であったことから、その状況下で、家庭や家庭教育における諸課題をジェンダー、セクシュアリティの視点から考えることにした。学生たちは、これまで以上に、家庭が性別役割分業を再生産する場になっていることを意識化していったように思われる。

「ジェンダーと教育2」では、予定通り「大学におけるジェンダー平等教育のあり方について考える」ことを主たるテーマに据えた。シラバスは次のようである。

第1回：大学教育におけるジェンダー・セクシュアリティ

第2回：ジェンダー・セクシュアリティの問題を世界的視野で考える

第3回：大学におけるジェンダー・セクシュアリティ教育のあり方を考える

第4回：討論 大学におけるジェンダー・セクシュアリティ教育のあり方を考える

第5回：討論 大学におけるジェンダー・セクシュアリティ教育のあり方を考える

第6回：まとめ

「1」、「2」を通して、TAを春藤優さん（法学研究科修士1年）にお願いした。春藤さんには、学部生の時代からジェンダー関係の授業の受講者として、また早稲田大学GSセンター⁵の学生スタッフとして、関わりを持つ機会があり、特に、春藤さんが学部生時代に本演習を受講した際に筆者が授業内で紹介した国連女性の地位委員会（CSW）でのインターンに応募し見事採用されてニューヨークの国連本部へ派遣された経験があり、それを学生に伝えてもらいたいと考えた。学生たちにはジェンダーセンシティブな自分を育てるために、大学生の時期に何らかの行動をしてみることに、国際的な視野で問題をとらえることなどを問題提起してもらいたいという狙いがあった。春藤さんは筆者の依頼に応じて、第2回の授業で大学入学以前からの問題意識や入学後の学びのプロセス、様々な立場の仲間と協働して実践してきたこと、そして、ニューヨークの国連本部内において経験し考えたことを語ってくれた。⁶大学におけるジェンダーやセクシュアリティに視点を置いたライフストーリーを聞くことを通して、受講生自身も自らの学びのプロセスをふり返り、大学で学ぶ意味を考えていったように見受けられた。

また、フォト・ウォーキングに代わる共同の体験、共同の実践を組み入れたと考え、「共同で考える」ということに軸足を置き直して、一橋大学社会学部の佐藤文香ゼミの卒業生を話題提供者として迎え、『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた—あなたがあなたらしくいられるための29問』⁷の作

⁵ <https://www.waseda.jp/inst/gscenter/>

⁶ 春藤優「CSW62参加報告」『ジェンダー研究21』早稲田大学ジェンダー研究所、2018、vol.8、pp.61-73.

成の過程を語ってもらうこととした。教材としては、すでに「ジェンダーと教育1」において、その内容を使って検討していた経緯があり、執筆代表者の見玉谷レミさんと前之園和喜さん⁸から討論過程やその中で考えたことを話していただいた。お二人からは、本の中から、「16. どうしてフェミニストはミスコンに反対するの?」、「17. フェミニストはなにかという女性差別というけど、伝統や文化も重んじるべきじゃない?」、「22. 女性専用車両って男性への差別じゃない?」の3項目とコラム「5 ジェンダーを勉強するとつらくなる?」が事前に提示されたので、それを読んで臨んだ。ゼミの仲間と担当教員の指導を受けながら討論を積み重ねたことなどが語られ、出版することになって以降、さらに言葉の吟味を重ねたことが語られた。

フォト・ウォーキングに代わって、少しだけ前を歩いている学生の学びを聞かせてもらう方法を取ることにしたが、同世代の学生の学びのプロセスを追体験することで、卒業間近の学生は自分の学びをふり返り、これから大学生活が始まる1年生は自分の大学生活への期待が自覚されていったように思われる。

グループワークを行う際には、毎回グループ内で司会と全体への報告者、そしてグループの話し合いの記録を作成し全員で共有するために提出する記録者を決めるように指示した。その役割を担うこと自体が、複数の視点やプロセスで展開する思考の意識化にとって重要だと考えているからである。

第4回、第5回は「大学におけるジェンダー・セクシュアリティ教育のあり方」をテーマとしてグループ討論を重ねた。筆者が設定した問いは、大学におけるジェンダーやセクシュアリティの視点で教育のあり方を検討するために、まず、受講者自身が、自らの中にジェンダーやセクシュアリティに関してどのような認識の変化があり、それは何によってだったと自覚しているか、そして、意識化されたことがらを手掛かりとして大学におけるジェンダー教育のあり方についてどのように考えるか、であった。

⁷ 明石書店、2019年。

⁸ ともに、執筆代表者。

グループの討論の記録から大学教育におけるジェンダー教育のあり方として
交わされた意見を読みとってみたい。

(2) 大学教育におけるジェンダー平等教育のあり方への提起

では、グループワークの中で、大学教育におけるジェンダー平等教育のあり
方についてどのような意見交換がなされていたのであろうか。いくつかの観点
からグループの記録を取りまとめてみる。

まず、ジェンダー教育の目的ついてである。

- ・自分が理不尽だと感じたことを批判する。
- ・啓蒙的な意味合い。
- ・学ぶことに意義がある。
- ・自分の中の無意識な偏見・差別に目を向ける。
- ・女性の生きづらさにだけフォーカスするのではなく、そこを入り口として、
性別に関係なく生きやすい社会を模索したい。
- ・アファーマティブ・アクションによって男女平等に過労死させるのでは意
味がない。
- ・全員が当事者だと感じさせられるような教育を目指すべきではないか。
- ・自分の身近なところから問題を発見する能力を育てる必要がある。
- ・男性が男性の抑圧を見つけ、そこから女性の生きづらさを見つけるとい
う道順。

箇条書きで多少結論部分が読み取りにくいところもあるが、何のために、ど
のような社会像を構想してジェンダー教育を行っていくことが必要なのかとい
う観点から議論されていることが読み取れる。問題を問題としてとらえ、問題
意識を持つための教育を求めている発言が交わされている。権力関係において
優位とされる男性がジェンダーについて学びを進めていく道筋を検討している
発言が興味深い。

次に、カリキュラムの設置についてである。

- ・必修科目として扱うのは難しいのではないかと。

⇒興味を持たない人が講義を通して興味がわいてくれるのはいいことだが、意識の差が大きい以上は全員に強制するという制度を設けるのには限界があると考える。

ジェンダーの授業を必修にしたらいいのではないかと、という意見と、必修科目にするのは難しいのではないかとという意見が拮抗している。

前者の意見の理由や背景には、ジェンダー問題は誰にとってもかかわりのない人はいないのだという認識がある。また、自分たち自身が演習の中でそれまで考えてみたことがなかった価値観に出会って新たな「発見」をし、知識を得ることと同時に一種の「驚き」に直面したことで、こうした授業を多くの学生が学ぶ必要があると考えていったことも指摘されている。

設置形態について次のような意見交換もなされている。

- ・学部ごとに設置されているジェンダー関連の講義を全学部が受講できる形にする。

⇒学部での学問と関連付けることで様々な角度からジェンダーについて考えることが可能になる。

⇒ジェンダーについての科目のバリエーションが増える。

⇒学部との関連授業を受講できることにも大きな意義があるが、自分の学部と関連づけられたジェンダーについての講義を受けることで親近感がわくとともに自分の専攻と同時に学べる。

- ・GECは討論形式が多いイメージなので、学部開講などでジェンダーの歴史などを学ぶ機会もあるとさらに知識が深まるのではないかと。

学部の科目に必修としておかれていなくとも、多様な学部の科目をオープンに開いてとれるようにしてほしいという意見が交わされ、それによって多様な専門性を背景にした教員や受講者の交流するところに魅力を感じている様に見受けられる。

しかし、所属学部にジェンダー関連の授業がないという学生からは、やはり

何らかの形で授業の設置を求める声が聞かれる。

この演習の前半で、スポーツとジェンダーやセクシュアリティについて取り上げたことがある。南アフリカ出身の陸上選手のキャスター・セメンヤ選手を紹介する記事を配布して、スポーツと「性別」はこれまでどのように考えられてきたのか、何を基準としていくのかということ进行讨论した。こうした事柄が国際的な議論としてあることを知らなかった学生は驚き、男女で分けられているオリンピックへの疑問、「今まで存在していた男女という枠組みが絶対的なものではないということに気づいた」という。「学問が男女に分かれていることが大前提に進められていること」、「男女という区分けが当たり前のものとして存在していること」「その区分けに気づけるようになった」と意見を交わし合い、「学部間にジェンダー関連の科目設置の差がある」ことにも気づいている。

では、授業の中で、どのような方法、内容、関係でジェンダーは学ばれていくのであろうか。

- 大学でジェンダーに関する授業が増えても、ジェンダーに関心のある人しか受けない→そもそもジェンダーにふれる機会を増やさなければ意味がない。
- 疑問をもつきっかけを作る
- メンズリブの視点から、マジョリティを教化するためにも、男性学の観点からのアプローチが必要

特に、授業の形態、方法についてグループからは以下のような発言が出された。

- ジェンダーを学ぶ大学生であることの自覚、ジェンダー教育そのものに対する自分の思いが芽生えた。ディスカッション形式の授業ならではの気づき
- 自分で意見を発信することで考えることができる。

また、討論をしていく際の関係のあり方については、「意識や知識に差がある中でどのようにジェンダー問題を伝えていくか」という問いを立てて討論し

ている。

- ・自分が伝えたいことが相手には知識としてなかった場合に自分が教える立場になってしまい、上から目線のような伝え方になってしまうのには抵抗がある。

学生たちは対等な関係の中で学びあいたいと考えている。それに対して出された意見として次の2つの意見が聞き取られている。

- ・誰もが経験したことのあるような身近な話題からスタートしてみるのはどうだろうか。
- ・初めからジェンダーという大きな枠で捉えないようにすれば話しやすいのではないか。

知識の量と問題意識を持つことや意識化の問題は関連することではないが、学生たちの中のこの問いについても、筆者は引き続き検討していきたいと考えている。ジェンダー問題のように、人と人との関係の問題を学びあうとき、そこには相互に主体的な関係の中で、互いを尊重しあい、時には互いの違いに出会いながら学びあうコミュニティを形成することが重要である。教員にはそれを支える重要な役割があるからだ。さらに、今期は学生たちが他との対話の中で感じる「つらさ」をそこでどのように考えていけばよいか、課題として課されたと感じている。第3回の授業の中で、『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた—あなたがあなたらしくいられるための29問』のコラム「5 ジェンダーを勉強するとつらくなる？」⁹についての質問や応答の中で、「つらさ」に触れる発言が出された。「女性を抑圧する側にいる男性である自分の立場をどう考えたらいいのか」、「過去を振り返ると友だちを傷つけてしまったのではないか」等、「つらさ」を抱えているという。その問いに児玉谷さんは丁寧に答えてくれた。コラムの中では「学ぶことに力がある」¹⁰と述べている。

⁹ 児玉谷レミ執筆。

¹⁰ 前掲『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた—あなたがあなたらしくいられるための29問』p190.

ジェンダーについて学ぶことが我々をやさしくしてくれるものであること、豊かな人間性を育てることにつながる学問として授業実践に向かい合わなければならないことを改めて考えさせられた場面であった。

最後に、隠れたカリキュラムについて言及する。それは、小中学校、高校までの問題のように思われがちであった。ランドセルの色、名簿の順番、制服、教師の校務分掌のあり方等指摘された。しかし、問題意識を持つようになると大学生活の見え方が変わったことを、サークルの活動やアルバイト先の性別役割分業のあり方と関連させて発言している。

- ・身近なことに違和感を持つようになった。例えば、バイト先：男性と女性の規則が違う（ピアスの穴、髪の色など）
- ・サークル：幹事長は絶対に男。それには当たり前のことになっていて、誰も疑問にも思っていない印象。
- ・バイト先の服装：オフィスカジュアルの基準が違う。男性はスーツ、女性はカジュアルなど。

学生たちは、ジェンダーの問題を考え合い互いに気づいていくために、どのようにしたら問題を問題として伝えられるのか、どのような学習の展開が可能なのかを考える問いを設定し、ジェンダーにセンシティブになるためには、相互に対等な関係の中で学習が行われる大切さを感じ取って、大学の授業のあり方・大学生活のあり方をとらえ直している。

（3）まとめ

今年度はコロナ禍の中で、オンラインでの演習は手探りの部分も少なくなかった。演習は、本来対面に対話しながら進めることを基軸にしており、オンラインでは制約が大きかった。ZOOMを全回使用していくことも考えたが学生側の状況からそれは負担が大きいと思われ、前半はオンデマンドを併用し、後半はZOOMで学生同士の応答を増やし、グループの話し合いの報告や記録から状況を読み取り、それを基に授業を展開させていくことに努めた。

そのような制約の中ではあったが、授業に参加した学生たちは本当によく考え話題提供者や他の受講者の話をじっくりと聴き取り考え続けていた。特にキャンパスで受講することがかなわないまま受講していた1年生がグループの司会や報告者を引きうけ積極的に学びを作ろうとしている姿は印象的だった。

地方の自宅から受講し続けた1年生が書いた感想の一部を紹介したい。

今の自分の価値観を疑ってみることは、時として今まで自分が信じて行動に移してきたことが振り返ると間違いだったと感ずることやよりよい方法があったと感ずることにつながる。私自身もこの講義を通して今までの考え方は違う視点から物事に向き合うようになった。この講義でもあったように、そのことで過去の行動を反省し、時として責任を感じて辛さ感ずることもあった。しかし、このような経験を大学生になってからすることが出来てよかつたと思う。ジェンダーについての知識を得られたことのみではなく、今生きている社会に対して批判的な視線を向けることでより良い社会を作るためにはどのような人たちの立場を考ずていくべきか、そしてどのような雰囲気がか人々に窮屈な思いをさせてしまっているのかを知ることが出来た。だからこそ、大学という場所でジェンダーについて学ぶことに大きな意義感ずている。もちろん大学より前にジェンダーについて考ずる機会を設けるべきだという考ずもあり、それには私自身も賛成だが、そのような機会が十分に与えられたとしても大学でしか教えられないことや、大学生になれる程度の年齢に達していなければ考ずられないことや思いつかない発想もあると考ずるため、大学でジェンダーについて考ずる機会は重要だと考ずる。

おわりに

以上、2019、2020年度のGEC設置「ジェンダーと教育」の授業の振り返りを報告した。最後に授業方法について触れておきたい。本演習の受講生は、大

学全体の学生を対象に設置されていることから、所属学部、専門、学年、どれをとっても実に多様である。それは、本演習のテーマをともに探究するうえでとても重要なことである。多様なメンバーで構成された授業の中で、資料を読み、話題提供者の話を聞き、グループディスカッション、全体での討論等に取り組んだ。特に、グループワークや記録作ることとその共有等を通して、互いの意見を聞きあうことを意識化することを演習の展開の中で重要な方法として位置づけて進めた。聞き取られた発言の共有が次の思考の展開の土台にもなっていた。その点で記録は重要であった。

本演習の授業方法は、筆者自身が成人教育の現場で学んできた方法を取り込みながら、これまで演習に参加してくれた皆さんの学びの姿に触発されて試行錯誤を重ねてきたものである。また、GECの全体活動として、大学院生や学部生の協力を得ながら学生主体のワークショップを開催してきたが、そこで先進的に取り組まれた方法にも学ばせていただいた。

ここで、改めてワークショップの初期の取り組みを担ってくださった矢内琴江さん（現・福井大学教職大学院特命助教）、安野直さん（現・早稲田大学文学研究科博士課程）、そして、授業に参加された皆さん、春藤優さんにお礼申し上げます。

ジェンダーをテーマとする演習の授業研究において、方法の吟味は、欠かせない要件である。

コロナ感染が終息した構内を学生たちとまたフォト・ウォーキングし、討論し合える日を待ち望んでいる。（2020年11月1日）